

薄暗い寢室にふたりの呼吸の音だけがひっそりと漂っている。快楽に呑まれればしぼんやりとしていたカケルは、呼吸が落ちて着くなりしつとりと汗ばんだ肌へとくちつつけた。

「ハイジさん」

自分の上に跨っている身体を抱え直すと、カケルは愛おしげに華奢な背を撫でる。くつたりとカケルの胸に凭れてその左肩に顔を埋めてしまっていたハイジは、「ん」と微かに喘いで小さく震えた。

言葉にしなかったが、「こうちを向いて」というカケルの願いはハイジに伝わったはずだ。けれど、顔を見せるどころかハイジは小さな子供がむずがるみたいに「層カケルにしがみつく」「ハイジさん」とカケルがもつ一度甘えた声でねだると、それでやつと抱擁が緩んだ。吐息と共にハイジがゆっくりと頭を上げる。

頬は蒼白色に上気し、微かに曇められた柳眉には仄かに物憂げな色が滲んでいた。伏せられた長い睫毛の下では金色がかつた琥珀のような瞳が濡れて潤んでいる。

カケルは魂を奪われたようにしつとりとハイジの表情に見凜れていた。綺麗だと思っ。それから理性のない獣に墮ちてしまいたくなるほど艶めかしいとも思っ。それなのに、そんなカケルの視線を嫌がるみたいにハイジは上げたばかりの顔を俯けその艶態を少しでも隠そうとする。

もつとよく見たくてカケルはハイジの頬へと右手を伸ばした。ハイジはまた少し柳眉を曇めはしたものの、頬を包むカケルの手のひらに抗おうとはしない。そつと顔を上げさせると至近距離で目が合い、その瞳の中に快楽の欠片や自分への愛情や清らかな恥じらいを見つけてしまつて血が沸き立つよつな感覚に襲われる。ついさつき果てたはずなのに未だ繋がつたままの部分か熱を帯びて疼き、カケルは無意識に細い腰を抱えている左腕に力を込めていた。

一瞬身を凍ませて「カケル」と何かを云いかけるも、見詰める眼差しに怯んだみたいにハイジはそれ以上言葉を継げずに気まずげに視線を外してしまつ。ゆらゆらと瞬く長い睫毛にハイジの困惑が見て取れた。同時に瞬きひとつすることに花卉のように色香が散るからそれが余計にカケルの表情を掻き立てる。その横顔にじつと視線を合わせたままカケルは静かに息を吐き出した。カケルを燻る為にはハイジがこういふ表情をしているわけではないことは解っている。

むしろ毎晩のように求められ際限なく欲しがるカケルのことをハイジは持て余しているくらいだ。事後の余韻が抜け切らぬ顔を見られるのをハイジが本当は避けたがっていることも知っている。多分、ハイジは相手がカケルだから我慢してくれているのだ。嫌だけどカケルが望むから仕方なく辛抱してくれている。そ

の証拠に、今もカケルが見詰める先では無遠慮な視線に必死で耐えているみたいに淡い薔薇色だった頬が徐々に鮮やかな緋色へと変化していく。嫌がることはしたくない、そう思うのだがその嫌がる姿すら可愛く映るのだから我ながら始末が悪い。

「ハイジさん、すげえ可愛い……」

掠れた声で囁くと、我慢出来なくなつたのかハイジが再びカケルの肩に顔を伏せようとする。完全に突っ伏してしまつ前にこめかみにくちづけるとハイジの動きが止まつた。その機に乗じて顎を割り込ませるようにして顔を上げさせ、カケルは啄ばむよつなくちづけを繰り返し始める。

ハイジの身体から力が抜けてきたところでカケルは舌を侵入させた。やわらかくなめらかな舌を絡めるとハイジはまたカケルを煽っているとしか思えないような声を漏らす。しがみつくと腕も可愛くて可愛くて堪らない。

飽きることも満たされることもないカケルはハイジの背中を思う様なすりつつ甘い口腔を貪つた。しかし、段々ハイジの舌の動きがゆつたりと鈍くなつてくる。カケルはくちづけをばき、ハイジの顔を覗き込んだ。予想通りハイジの瞳はとろりと眠たけで既に半分程目蓋が落ちてしまつている。

「ハイジさん眠い？」

ハイジが子供のようにつくりと頷く。カケルは今日はいこまで

かと、ハイジの細い身体を抱きかかえようとすると自分自身を引き抜いた。その刺激にハイジがか細く啼いて首に縋り付いてきたので、もつ一度その身体を布団の上に組み敷いてしまいたくなる。ハイジさんは誘つてるわけじゃない、今のこの人は寝惚けてるようなもんなんだとカケルは自分に云い聞かせ、ハイジの身体を寝真の上へと横たえた。「おやすみなさい」と舌をかけても、「うん」とぼやんとした返事が返ってきただけで、汚れた身体を清め終えてやった頃にはハイジはすつすつと完全に眠つてしまつていた。

自分の方の始末も終えると、カケルはハイジの隣に潜り込む。まだ熱が残つた身体を引き寄せてもハイジが目を覚ます心配はない。安心しきつた寝顔が可愛くて、カケルはハイジの額にくちづけた。

「このところハイジはことがすむなり眠つてしまつた。」

最初にくちづけの最中に寝入られたときは死ぬほどびびくりした。直前まで舌を絡めていたのにいきなりぱたりと動きが止まり、びびくりして心臓が止まりそうになつて必死で名前を呼んで揺さぶつたら、すぐに目を開け、「すまない……寝てしまつた」とあっさり謝られて拍子抜けした。その後、すいぶんふわふわ瞬いてるなめと見守っていたら、案の定、話の途中ではたりと目蓋が閉じてしまつた。



いる違つ。可哀想なぐらゐに緊張して身を硬くしているよつなことはもうないし、声や仕草に堪えきれないよつな甘い嬌艶が混じつている。それに殆ど癡撃するみたいに締の付けてくるよつななつた。カケルの方もそれを気持ちいいと感じていたが、そんなハイジの身体の反応が強烈な快楽によつて引き起こされている。だなんて考えてもみなかったし、その上それが眠りを引き寄せざる原因になっているなんてそれこそ夢にも思つていなかった。

ハイジが嫌なら禁欲しようかと真剣に悩んでいたカケルは心底ほつとした。自分だけじゃなくちゃんとハイジも身も心も溶けるよつな悦樂を得ているのだと解つて嬉しかった。うとうとしている姿を目にすると自分は愛しい人を満たすことが出来たのだとちよつと得意げな気分にもなつた。何より嘘の吐きよつがないう指標が手に入つたことをカケルは密かに喜んでた。

ハイジはどうされるのが好きかとどこが気持ちいいのとか一切教えてくれない。おまけに最中の顔を見られることをとても嫌がり、大抵腕で隠されたり肩に伏せられたりしてしまつてのでもいいのか悪いのか解りづらゐ。

カケルには、正確にはカケルとハイジにはある秘密がある。

村の戒律を破り成人の儀を迎えるより先にカケルがハイジに手を出したことはない。あのときはハイジが攫われて二度と生きて会えないかもしれない。事情が事情だけに族長である父

も口煩い長老たちもみなカケルの暴挙に目を瞑つてくれた。公然の秘密扱いになつてゐるのではなく、本当に秘密にしなければならぬことはカケルが誘拐事件のそれより前からハイジの肌を知つていたことだ。

一線を越えたのは事件のあとだが、その前から何も纏わない裸のハイジにカケルは何度も触れていた。最初ははだけただ着衣に手を差し入れる程度だつたけれど、カケルは触れれば触れるほどもつともつとその先をねだつた。ハイジはいつも困つたり迷つたりしていたが嫌がつてはいなかった。けれど、触れられて思はず声を零したとき、ハイジはその顔をカケルの視線から隠した。目を許を覆つ腕を退かそうと、何気なく細い手首を掴んだら激しく抵抗された。驚いてわけを尋ねたらハイジは、「怖いから嫌だ」と答えた。

恥ずかしいではなく、怖いからだった。

不思議に思つたが、恥ずかしいよりもその響きに重いものを感じたカケルは二度と顔を隠すハイジの腕を掴んだりするよつなことはなかつた。

今はどちらか感つよつなことはないが、最初の頃は愛撫の最中顔を隠された状態で、「やだ」と云われるたびにそれが真実なのか裏腹なのか解らなくて焦ることも多かつた。声だけでどつちなのかを見抜けるよつになつてからも、自分ばかりいい思いをしてい

るのではないかと気に掛かっていた。だから、気持ちよすぎるとハイジ自身ですらどうにも出来ずに眠ってしまつていつのは非常にありがたい。連日先に寝られてしまつのは少し寂しくもあつたが、寝顔を見詰めては今日もそんなによかったのかとにやけそつになる。カケルはこつして無防備に眠るハイジを眺めるのが好きだつた。

一緒に暮らしたときはいつも自分の方が先に寝てしまつていてハイジの寝顔を見るようなことはなかつた。それが今では大抵カケルがハイジの世話を焼いてから寝ている。

ハイジの方が八つも年上なのにカケルはハイジが可愛くて可愛くて仕方がない。先程の頬を染めて恥らっている様子も頭がどうにかなりそつなくらいに可愛かつた。

強行に暴く気がないだけで、カケルも隠されたハイジの表情に興味はある。偶々目にするこの出来た泣き出しそうな顔や陶然とした表情はそつそつと可愛かつた。深い快感に沈んでいるハイジなんて絶対壮絶に可愛い表情をしているに違いないので正直に云へば物凄く見てみたい。それでも、ああして事後に顔を見せてくれるだけでもハイジにかなりの忍耐を強いっているのは確実なので、今はこれ以上のことを求めるつもりはない。いつかでいいから見ればいいと思つてゐる。

カケルは幸せだつた。戦は回避されふたりの生活を脅かす危険

は去つた。この平和な毎日がずつと続けばいいと思つた。

自分もそろそろ眠りにこつて、もう一度ハイジの細い腰を引き寄せたときだつた。

そついいえ。

そついいえ、ハイジは一向に孕まない。

あの事件の後、ハイジを初めて抱いた夜からもう二年近くが経過している。ハイジとの子供ならいつ出来てもいいとカケルは避妊なんてしたことなかつた。子は神からの授かりものだからこれまで気にも留めなかつたが夜が訪れるたびに毎晩のように身体を重ねているといつのもしかしてこれは少しおかしいのだろうか。

温かな幸福に溢れていた心が急速に冷えていく。思い出したくもないのに、昔ハイジが嫁いで間もない頃、叔父たちに投げ付けられた言葉が胸の奥底から浮かんでくる。子が出来るのか心配だと、そつ嘲弄された。

カケルはハイジの身体を抱きしめながら奥歯を噛む。違つ。何も心配する必要なんてない。まだふたりきりの生活を樂しめばいいと神がそつちつてゐるのだ。だから身籠らないだけだ、別に何もおかしくなどない。

やわらかな髪に頬を擠り寄せカケルは、「ハイジさん、ごめん」と眠るハイジに語りかけた。くだらないことを考えてしまつた自分に